

ホームレス問題と道德教育 ～受講による学生の見方の変化と教科「道德」～

広島国際大学心理科学部 鹿嶋達哉

道德の逆説は行動・実践と関係があり、現実生きられることを要求する

Jankélévitch 「道德の逆説」

論文要旨： ホームレス問題では本人の責任を重視する「よくある素朴な見方」と種々の社会問題を重視する「支援者側の見方」が対立することが多い。大学生が支援者の講演を聞く前後の見方を調べ、その変化と上記2つの見方との対応性を検討した。さらに、2018年に告示された教科「道德」とホームレス問題との関連を考察した。野宿者襲撃（いじめとの同型性が指摘されている）、ホームレス生活者に対する偏見と差別等は、本来道德教育が解決すべき問題であるが、今回の改訂では自主・自律、節度、遵法精神・公德心、社会正義、社会参画・公共の精神、勤労、家庭生活の充実、集団生活の充実等を重視するあまり、ホームレス生活（者）を否定・排除する背景・理由づけとなる危険性がある。「あるべき姿」を教える道德教育に対して、現実の悪（人・社会・私の中にある）への向き合い方を示した発達のモラルレジリエンスモデルの道德教育における可能性も併せて考察した。

問題と目的

I ホームレス問題に対する学生の見方と受講による変化

鹿嶋（2018）は2003～05年度に実施されたホームレス生活者に対する支援に関する研究（稲垣，2006）に基づき、ホームレス生活者に関わる多様な人々の多様な見方を描き、ホームレス問題の多面性と求められる支援・ニーズの多様性を明らかにした。また、ホームレス問題に対する地域住民や行政担当者の「よくある」「素朴な」見方（出会いの家，1996を参照にした）と支援者を見方を対比し、それぞれの見方の特徴を明らかにするとともに、ずれの次元を整理することにより、両者の対話に必要な基盤づくりを行った。さらに、ホームレス生活者の主として心理的ニーズに焦点を当て、求められる支援や支援者・団体による有効な心理学的支援を整理することにより、心理学的関与の可能性を示唆した。そして、ホームレス問題と現代社会・市民の間にある「つながり」を明確にすることで、ホームレス問題が「われわれの社会」における「われわれの問題」であることを明示した。

それでは「よくある素朴な見方」はホームレス問題・生活者について知ることで支援者側の見方に近づくのであろうか。本研究では、1) 大学生はホームレス問題に対してどのような見方をしているのか、2) その見方は支援者の講演によりどのように変容するか、3) 当初の見方と変容後の見方は「よくある・素朴な」見方と支援者の見方という2つの見方に対応するかを検討することを目的とする。

II ホームレス問題と道德教育

さらに、ホームレス問題に対する見方を、義務教育における道德教育（特に2018年に中学校学習指導要領に特別教科として告示された「道德」（文部科学省,2018；以下「教科道德」と略す）とどのように関連するかを検討する。その理由は以下の通りである。

- 1.1982～1983年にかけて横浜で少年（14-16歳）10名が次々と野宿者を襲撃し、3名が死亡、十数名が重軽傷を負う事件が起きた。同種の事件はその後も続き、村尾（2006）によると1983年～2005年に25件の襲撃が報告されている。これらの事件は学校におけるいじめ問題とともに、子どもの心の教育（道德教育）のあり方の再考を促すことになった。
- 2.今回の改訂の議論の発端は「いじめの問題への対応」である（文部科学省,2018,p.3）と明記されているが、野宿者襲撃は「いじめ」との同型性が指摘されている。生田（2005）は「学校内虐待＝いじめ」と「学校外虐待＝野宿者襲撃」に多くの共通項を見出している。そこには自信の欠如、仲間はずれの不安による過度の同調、外部者への攻撃によるストレス発散、親からの圧力による緊張などが含まれる（p.142）。
- 3.今回の改訂はいじめ問題、それに対応関係のある野宿者襲撃、ひいてはホームレス生活者に対する差別と偏見の解決・解消・低減を意図したものである。しかし、逆に「道德教育」がいじめ、野宿者襲撃やホームレス生活者に対する差別と偏見につながる危険性を指摘する必要がある。芹沢（1998）は襲撃を、1) 社会の秩序外のものに対する排除（外国人狩りと関連）、2) 「弱い」ものや「社会の役に立たない」ものへの攻撃（小動物・子ども・高齢者への虐待と関連）、3) （自己に関係する狭い）社会の秩序の維持という「大人の本音」との対応という観点から考察を行っている。「ウチの社会秩序」を重んじるあまり、「外（ソト）のもの」を排除し、「社会における有用性」を強調するあまり「役に立たない」ものを否定する危険性がないのか、またそれらは大人（社会）に陰伏する傾向を子どもが（過敏に）感じ取ったものではないかという確認も必要である。滝川（2017）は非常に均質性の高い同年齢集団（友だち集団、仲よし）が、異質性への違和感・警戒感（いじめ）の温床になりうることに注意を促している。

表1 教科道徳に関わる22の内容項目（文部科学省,2018）

<p>A 主として自分自身に関わること</p> <p>①自主・自律・自由と責任、②節度・節制、③向上心・個性の伸長、 ④希望と勇気・克己と強い意志、⑤真理の探究・創造</p> <p>B 主として人との関わりに関すること</p> <p>⑥思いやり・感謝、⑦礼儀、⑧友情・信頼、⑨相互理解・寛容</p> <p>C 主として集団や社会との関わりに関すること</p> <p>⑩遵法精神・公德心、⑪公正・公平・社会正義、⑫社会参画・公共の精神、⑬勤労、 ⑭家族愛・家庭生活の充実、⑮よりよい学校・集団生活の充実、⑯郷土愛、 ⑰国を愛する態度、⑱国際理解・貢献</p> <p>D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること</p> <p>⑲生命の尊さ、⑳自然愛護、㉑感動・畏敬の念、㉒よりよく生きる喜び</p>
--

4. 今回の教科道徳（中学校）の改訂では「内容」として表1の22項目があげられている。

ホームレス生活者・野宿生活者は①自律と責任、②節制、③向上心、④克己、⑦礼儀、⑩公德心、⑫社会参画、⑬勤労、⑭家庭生活の充実等の項目に一見反する特徴を示している。ただし、これはあくまで一見であり、事実とは必ずしも一致しない。しかし、「よくある見方」「素朴な見方」（鹿嶋,2018）ではホームレス生活者は望ましくない状態を具現化する例（代表）のように見えてしまう可能性がある。

5. 道徳においては諸価値の対立・葛藤こそが現実的な問題となる。例えば Kohlberg（永野, 1985）の「ハインツのジレンマ」では妻の命（⑲生命の尊さ）を守るために盗み（⑩遵法精神・公德心に反する）は許されるかがテーマである。ホームレス問題はまさしく諸価値の対立・葛藤の問題（例えば、⑲生命 vs. ⑩公德心、①自由 vs. ⑫社会参画・公共の精神、など）である。そもそも22項目の中には相互に対立しやすいもの（①自由 vs. ⑩公德心、③個性の伸長 vs. ⑪公正・公平・⑮集団生活の充実）も含まれている。複数の価値が対立するときの調整方法、価値の中の優先順位などが問われる。

6. さらに、この22項目は「道徳」に限られたものではなく、慣習（⑦礼儀）や個人の信条（⑯郷土愛、⑰国を愛する態度）に関わるものが含まれている。

7. 野宿者襲撃やいじめは道徳性の欠如だけでは説明しきれない。子どもの生育歴上の問題、特に親からの虐待と学校におけるいじめられ体験との関連性が指摘されている（生田,

2005, p144 ; 北村, 1997)。道德教育は徳目教育や認知構造の発達を越えた全人的な発達（愛着関係、暴力の連鎖、環境への反応）と関連づける必要がある。

8.これに関連して、鹿嶋（2017）は、あるべき「善」を教える教育に対して、悪の存在を前提として、①「悪との接触」にそなえ、②接触に対して効果的に対処し、③その悪影響から回復し、④成長する過程と能力を発達のモラルレジリエンス（DMR）モデルを提唱した。DMRモデルからもホームレス問題と道德教育のあり方を検討する。

Ⅲ 野宿者襲撃事件

1983年に横浜で「浮浪者襲撃事件」が起きた。「浮浪者」30人以上が10人の少年（中学生6人を含む）に「プータロー狩り」と称して襲われ、3人が死亡、13人が負傷した。少年たちは「浮浪者は汚い」「地下街が汚いのはこいつらのいるせいだ」と理由づけをしていた。逮捕後、少年たちは「とにかく胸がスカッとした」「おもしろかった」「スリルがあった」と発言した（生田,2005）。

その後も少年や若者による野宿生活者（ホームレス生活者）に対する襲撃は後を絶たず、北村（1997）、生田（2005）、西村（2005）、村尾（2006）等による報告と考察が行われている。例えば、生田（2005）は野宿者襲撃に関して次の点から論じている。

- 1.野宿者の現実に対する無理解や誤解に基づく偏見と差別（働いていない、役に立たない）に基づき襲撃が行われ、正当化されている（p23）。
- 2.その偏見と差別は世間一般に流布し、社会一般が有するものと同型である（p23）。
- 3.少年たち自身も「何もしなければ生きる価値はない」という圧力を日々受けている（p23）。
- 4.少年はある種の「正義感（本人の表現では『裏の正義』）」で襲撃を行った（p24）。
- 5.2002年に埼玉で野宿者を殺した中学生は「スポーツ万能で人権標語で表彰されたマサオ」と「母親思いで小さい子の面倒見もよかったヒロシ」「おとなしくかわいいと人気者のヒロシ」の3人であった（p41；名前はいずれも吉田（2004）における仮名）。アキラは「一緒にいてやらざるをえなかった。やらないと仲間はずれになる。」とやった理由を述べている。外部の他者に対する共感の欠如のみならず、強い「ウチ」の論理・結束が襲撃の背景をなすことが示唆される。また、襲撃する若者には「やさしい」とみられていた子が少なくないが、そのやさしさは身近な家族や友人にだけ向かい、それ以外の人間には反作用としてひどいことも平気のできる（p.138）。さらに、「人権標語」及び人権標語を作ることによる教育の無意味さ・無力さも露呈している。
- 6.身近な動物（ペット）や遠くで苦しんでいる人（アフリカの難民）には同情するが、そ

の「中間」にある日本の「近所にいる」野宿者には無関心である (p64)。

7.世界各国では若者のホームレスが激増し、そこでは若者自身がホームレスになる可能性が高いという知識と想像力が欠如している (p28)。ただし、これには高度な知識と想像力を要求される。

8.大人・社会側が「いのちの大切さ」という抽象論・博愛論にしてしまうことで、事件の個別性が流されてしまう (p17)。

以上のように従来の道徳教育では野宿者襲撃を抑制できないどころか、「ウチ」の論理・結束による「ソト (あるいは中間)」の排除を助長する危険性さえも否定できない。

そこで道徳教育の側からではなく、ホームレス問題の方から (道徳) 教育を行う (ホームレス問題を教育の教材にする) 試みがいくつか行われている。

「ホームレス作家」の著者松井計 (2003) が『『生きる』ってなんだろう』シリーズ (小学校高学年より中学生対象) の第6巻「ホームレスだったぼくから、きみたちへ」の中で、「ホームレスだった人の生き方や考え方を聞き、彼らもけっして私たちと無関係な『特別な人たち』ではないということを理解」することを目指して、ホームレスになる理由・道筋、ホームレスの生活と姿、社会復帰の困難さ等について述べている。

また、開発教育研究会 (2009) は ESD (持続可能な開発のための教育) 実践教材集として「身近なことから世界と私を考える授業」のテーマとして「野宿問題」と取り上げ、「ホームレスってどんな人」「野宿生活者をとりまく社会～私たちのくらしと野宿生活者」「いま、私にできること」に関する教材を提供している。

鈴木 (2010) は立教大学コミュニティ福祉学部福祉学科において『『ホームレス』と呼ばれる人々の生活を理解する』と称して実施された「福祉ワークショップ」による学生 (12名) の変化を報告している。授業は講義、映画鑑賞、活動への参加・報告・意見交換・レポート作成からなる。特に、「新宿・スープの会」への訪問活動前のホームレスに対するイメージ、活動参加の動機、参加時の気持ちとホームレスに対する印象、「人の役になっていると感じたか」、「救われていると感じたか (背景にキリスト教)」、「人に勧めたか」、「自分自身の役に立ったか」に関するアンケートに対する学生の記述と、12名の学生の「活動参加レポート」が紹介されている。

IV 道徳教育 (特に 2018 年に中学校学習指導要領に特別教科として告示された「道徳」)

学習指導要領における道徳の定義、求められているもの、課題、役割、内容、目標を示

し、ホームレス問題との関わりを簡単に述べる。

1) 定義：道德教育とは「自立した一人の人間として人生を他者とともにより良く生きる人格を形成することを目指すもの」とされる (p.1)。

ホームレスは「自立」していない存在として見られる。そのため「自立支援法」の対象となった。「ともにより良く生きる」対象である「他者」に「ソト (中間)」の者も含まれるのかどうか、具体的には現行の社会秩序に属さない人は「他者」なのかどうか。

2) 求められるもの：人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を前提に、人が互いに尊重し協働して社会を形づくっていく上で共通に求められるルールやマナーを学び、規範意識などを育むとともに、人としてよりよく生きる上で大切なものは何か、自分はどのように生きるべきか、時には悩み、葛藤しつつ、考えを深め、自らの生き方を育んでいくことが求められる。

「人間尊重の精神 (人権意識) と生命」がルールやマナーに優先していることが前提とされているが、ホームレス問題では社会秩序の外にいるものに対する人権と生命が尊重されているとは限らない。

3) 課題： i) 様々な文化や価値観を背景とする人々と相互に尊重し合いながら生きる。
ii) 人間の幸福と社会の発展の調和的な実現を図る。

ホームレス生活者は異なる「文化や価値観」を持つ人々となりうるため、それらの人と「相互に尊重し合いながら生きる」ことが求められている。また、「人間の幸福 (個人)」と「社会の発展」の調和的な実現を図る場合、優先順位はどちらにあるのか。これは人間存在の根源に関わる両義性 (鯨岡,1998) であるため、簡単に「調和的な実現」を図ることは困難であり、実際には (特に日本社会では) 社会が個人に優先してきた伝統がある。

4) 役割：社会を構成する主体である一人一人が、高い倫理観をもち、人としての生き方や社会の在り方について、時に対立がある場合も含めて、多様な価値観の存在を認識しつつ、自ら感じ、考え、他者と対話し協働しながら、よりよい方向を目指す資質・能力を備えること。

ここでは対立の可能性と対話・協働による取り組みが明記されている。ただし、学校教育、労働環境、政治情勢、国際関係をみたとき、子どもが対話と協働による取り組みを実感できるかどうかは疑問である。

5) 目標

イ) 道德教育の目標に基づいて行う

- ロ) 道徳的諸価値についての理解を基にする
- ハ) i) 自己を見つめる、ii) 広い視野から多面的・多角的に考える、
iii) 生き方について考えを深める
- ニ) 道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる

1) 「他者とともにより良く生きる人格」が目指され、善悪判断や良心（場合によっては神）など「他者とともに」を越えた視点が欠落している。鹿嶋（2017）は日本語の「道徳」とフランス語・英語に由来する「モラル」を比較し、モラル・レジリエンスの重要性を指摘している。

2) 諸価値の並列に対する批判は上記のとおりである。

3) 自己から出発して他者にたどり着くのか？他者から出発しない限り他者には届かないのではないか（例えば Levinas, 2005）という視点に至っていない。

4) 個体能力論的発達観であり、道徳教育では関係発達論的視点（例えば鯨岡, 1998）や社会への参加（Lave&Wenger, 1993）を重視する発達観が適当であるとも考えられる。

IV 従来の道徳研究の問題点と発達のモラルレジリエンスモデル（DMR）

これまでの道徳教育は Kohlberg（永野, 1985）の認知構造理論が重視されてきた。しかし、この理論およびそれに基づく道徳教育には、「日常的な社会経験からかけ離れた劇的なエピソードに対する道徳的推論は、子どもにとっての意味があり、それを文化的バイアスのかかった（普遍的ではない）高度に形式的な発達段階に分類したものが現実生活にどのように関連するかが不明である」という批判がある（Damon, 1990）

さらに、広義の社会道徳性は社会慣習的発達（Turiel）、向社会性（Eisenberg）、公正（Damon）等からなり（Damon, 1990）、Kohlberg の認知構造論で説明されるのはその中の一である。今回の「道徳」の 22 項目も多種多様なものが混在し、内容的な整理は困難なほどある（指導要領では領域別に整理されている）。

以上のように、ホームレス問題から道徳教育のあり方を検討することにより、ホームレス問題の背景をなす社会の見方の問題点が明らかにされる。

方 法

大学生がホームレス問題に対してどのような見方をしているか、その見方は支援者の講演によりどのように変容するかを明らかにするために次のような調査を行った。

調査対象者は大学で「コミュニティ心理学」を受講した臨床心理学科年生 120 名であつ

表 2 受講前後における学生の記述内容

受講前の記述 (47 種類)	受講後の感想 (56 種類)
生活と気持ちについて (11)	全体的印象 (17)
働かない理由 (10)	理解 (16)
支援活動 (7)	見方・感じ方の変化 (11)
支援の必要性 (12)	関わり方・支援活動 (6)
個人的体験 (7)	講師へ (6)

※ () は種類の数 (重複を省いているため記述数はこれより多い)

た。調査は 2004 年 1 月に行った。まず、前回に予告としてホームレスの支援者に講義していただく旨を説明し、これまでのホームレス体験、ホームレス問題に対する理解、支援者にきいてみたいことを書いてもらった (表 2「受講前の記述」47 種類)。当日、支援者の方に特別講義を 80 分していただいた。支援者は科研 C「非定住者の生活ニーズと保健・医療・福祉の支援のあり方」の共同研究者で、釜ヶ崎で活動されている看護師であり、ホームレス生活者の現状・生活の姿、ホームレス生活になった理由・原因、支援の必要性と実際、学生に望むことなどを語った。講義後、学生に感想を書いてもらった (表 2「受講後の感想」56 種類)。両者を整理したものを分析の対象とした。

なお、補足資料として、鹿嶋 (2018) における「表 1 ホームレス問題に対する『よくある』批判と支援者側の見方」、および大田・小橋・長野・木佐・玉城・福地 (2002)「ホームレス者に対する認識と受容度に関する意識調査」(社会医学研究、第 20 号) における調査結果を参照にした。これは北海道大学の 1・2 年生 447 名を対象に意識調査を行ったものである。

結果と考察

学生の記述を A 情報源、B ホームレス生活者に対するイメージ、C ホームレスに対する見方 (受講前)、E ホームレスに対する見方 (受講後) に整理したものが図 1 である。

A) 情報源：ホームレスを知るきっかけ、接した経験

「小さい頃から見ている」「よく見た」学生と「初めて知ってびっくりした」学生まで親近度は多様であった。「からまれた」「お金をねだられた」という経験を持つ学生がいる一方で、「世話になった」「悪い人ではない」とよいイメージを持つ学生もいた。また、「毛布を送った」「母が支援をしている」という回答も見られた。

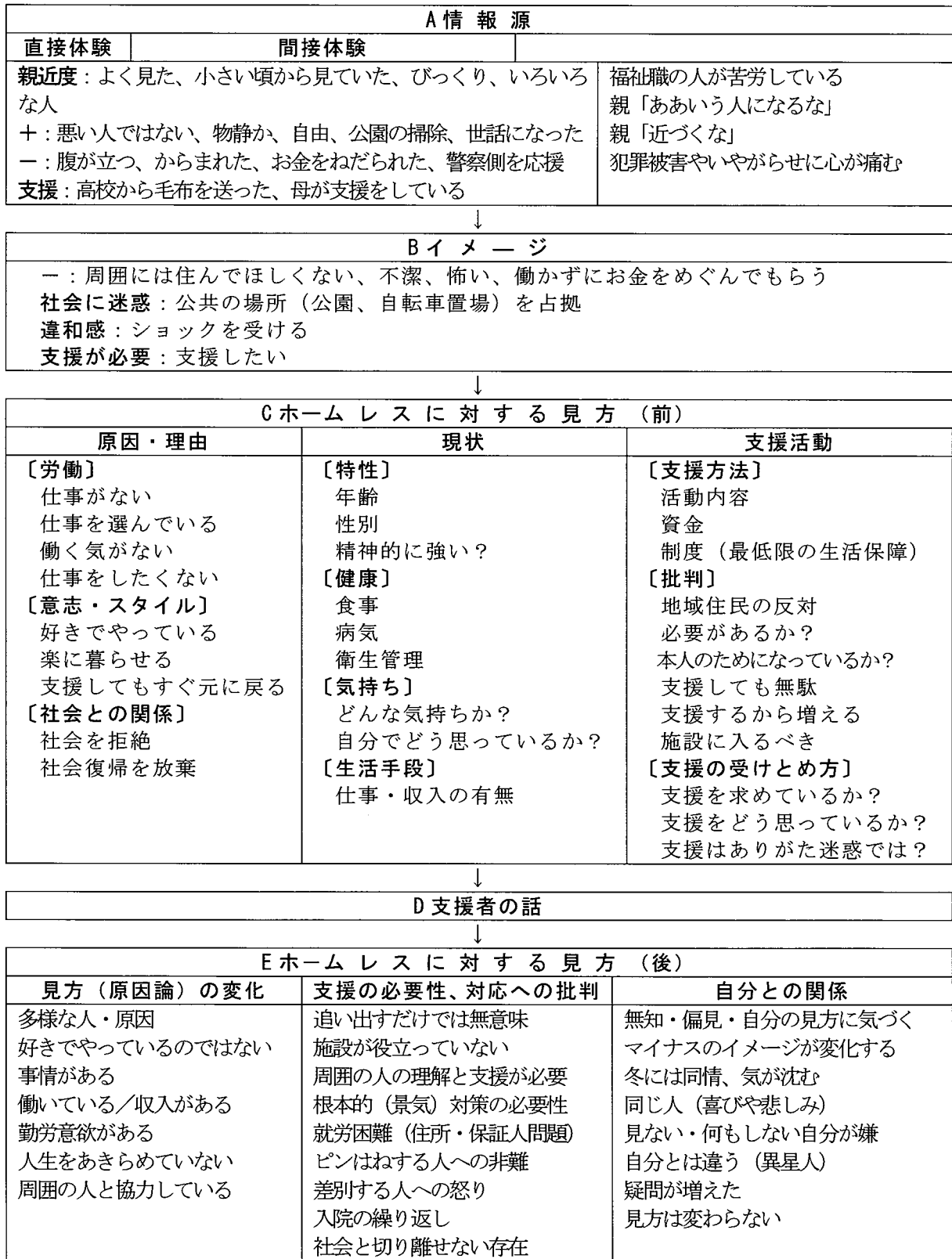


図1 ホームレス問題に対する受講生の理解とイメージの変化

直接体験だけではなく、知り合いの福祉職の人から聞いた苦労話や親から「ああいう人にはなるな」「近づいてはダメ」などの間接体験も報告された。

大田他（2002）によると、「ホームレス者を知らない」と答えた学生は、447名中わずか3名であった。「実際に見たことがある」が75.6%、「テレビ・新聞・雑誌で知った」がそれぞれ79%、38.3%、10.7%であった。

B) ホームレスの人に対するイメージ

ホームレスの人に対しては、「不潔」「怖い」「社会に迷惑をかけているという」などマイナスのイメージと、「ショックを受ける」「支援したい」というイメージがあった。

大田他（2002）によると、ホームレス者に対して「くさい」（63.8%）、「街の景観を損なう」（62.9%）「子どもの安全が心配」（38.3%）と否定的なイメージがある一方で、「危害を加える」「気ままな生活を楽しんでいる」について「そうは思わない」と答えたものが、それぞれ67.6%、51.7%と過半数を越えた。

C) ホームレスの人に対する見方（受講前）

受講前のホームレスの人に対する見方を、「原因・理由」「現状」「支援活動」について整理した（図1）。支援活動についての記述が多いのは、支援者に対する質問のためである。

ホームレスになった／を続けている「原因・理由」としては、「働く気がない」「仕事をしたくない」「好きでやっている」「社会を拒絶している」など、本人の性向に帰するものが多かった。素朴な見方（鹿嶋,2018）でも原因としては「本人の性格・能力」「好きでしている」「社会生活を拒否」、続ける理由としては「好きで」「選択している」「楽しんでいる」、脱け出させない理由としては「本人の性格」「努力不足」があげられている。大田他（2002）では、「自分の責任」であるについては、「そう思う」が34.5%、「そう思わない」が24.8%、「どちらともいえない」が40.3%と意見が割れている。同様の傾向は「現在の生活を改善したいと考えている」にもあてはまり、それぞれ39.1%、34.8%、25.7%となっている。

「現状」に関しては、本人の特性や健康状態、気持ち、生活手段に対する関心・疑問が多かった。鹿嶋（2018）では現状に関して、労働（以前と現在の労働状況、労働意欲）、生活状況（生活、食事、アルコール、健康状態、公共の場での生活、居住地域）について2つの見方を対比させた。大田他（2002）は、生計の立て方に関する認識を尋ね、「何もしていない」と思っている学生はわずか3.1%であり、「物を拾う」（31.5%）、「日雇い労

働」(31.3%)「廃品回収」(21.0%)と何らかの方法で生計を立てていると認識している学生が多いことを示した。

「支援活動」に関しては、「必要があるのか」「本人のためになっているのか」「支援しても無駄」「支援するから増える」と支援活動の必要性や効果に疑問を呈するものと「支援者が支援をどう思っているのか」を問うものが多かった。「素朴な」見方では「支援に値する者にだけ支援(選択的支援、部分的に有効)」「支援するから自立しない」と支援に批判的であった。

受講前の見方は「本人のせい」とまとめられよう。素朴な見方には次のような特徴があるが、学生の受講前の感想にもあてはまる。①限られた情報・誤った現状認識から形成されている。(例:働く気がない、好きでやっている、社会復帰を放棄など)②問題の範囲が限局的で、全体的に整合性のある理論ではない。(労働環境や地域における差別・困難についてあげられていない。)③原因と結果を混同している。④原因を個人に帰属する(「本人のせい」)。

D) 支援者による講演(内容は上述)

E) ホームレスの人に対する見方(受講後)

受講後の感想は、「見方の変化」「支援の必要性・対応への批判」「自分との関係」にまとめられた。

「見方(原因論)の変化」としては、「多様な原因」「いろいろな事情」「好きでやっているのではない」と本人に帰属する傾向が弱まり、「働いている」「勤労意欲がある」など「何もしない」イメージがなくなり、「人生をあきらめていない」「周囲の人と協力」など、将来や社会とのつながりに目を向けている。支援者側(鹿嶋,2018)も原因を労働環境や社会制度などに帰し、他に選択肢がない、働いている、働く気があっても仕事がない、必死に生きているという見方をしている。大田他(2002)でも、「経済不況のせい」とみなしている学生が73.8%いた。

根本的対策(景気対策や福祉制度)や制度上の問題による就労困難に気づき、有効に機能していない対策、ホームレスの人を取り巻く人々に対する不満や怒りも見られた。支援者側(鹿嶋,2018)も労働環境、制度の誤運用、違法状態の継続、機能しない福祉制度などを問題視している。大田他(2002)でも、「就職のチャンスを平等に与えるべき」(71.6%)、「生活保護を受けるべき」(42.3%)、「周囲のあたたかい理解が必要」(38.7%)と、支援の必要性を認める学生は多い。また、ホームレス対策としても、「仕事」(40.7%)がもつ

とも多い。

最後に、「自分との関係」を考える記述も見られた。自分の無知や偏見、マイナスのイメージの変化を報告したものがあつた。感情的には同情を感じても、「何もしない」自分が嫌という感想もあつた。その一方で、「何も変わらない」「嫌だ、軽蔑する、許せない」という感想ある。その背後には2つのパターンがあると思われる。第一は、これまで、「嫌な」直接経験を重ねているもの。第二は「許せない」「存在を認められない」「迷惑だ」「役に立っていない」など、自分の価値観から否定しているもの。後者の表現や見方に「偏見」の温床がうかがわれる。支援者には「何かせざるをえない」「何かをするのが当然」と感じていた。大田他(2002)では、「ホームレス問題が自分と関係ある」と答えた者が33.3%、「関係ない」と答えた者が64.0%であつた。また、自分が「ホームレス者になる可能性」は「ないとはいえない」「可能性がある」がそれぞれ43.6%、9.6%、「おそらくない」「絶対ない」がそれぞれ31.8%、14.3%であつた。

F) まとめ

学生はこれまでの直接的・間接的体験をもとに、ホームレスの人に対するイメージを形成している。「素朴な」見方としては、「本人のせい」とする見方が多く、「支援しても無駄」という考え方が優勢である。支援者の講義をきくことにより、本人のせいだけではなく、周囲・環境の問題があり、多様な事情があること、有効な支援・対策が求められており、それにより「社会復帰」できること、自分と無関係な問題ではないことなどに気づいた。素朴な見方とその変容は2つの見方(鹿嶋,2018)に対応する。また、認知的に変容する(しやすい)面と、感情的に受けつけられない面、暗黙の価値観により否定してしまう面があり、特に最後の面が偏見を形成・持続すると考えられる。

Furnham(1988)は、科学的理論との比較の上で、「しろうと(専門家ではない人)」が社会科学に関わる現象を理解・説明する際に利用する理論・信念を「しろうと理論」と名づけ、表3のような諸特徴を有するとしている。しろうと理論の特徴は、本章の「否定的な見方」によくあてはまる。「しろうと理論」という概念には、見下したり、低く評価したりする意図は含まれていない。むしろ、限られた情報の中で、現実的な対応を果たす実践的な機能が重視されている。その一方で、新しい情報により変容しないほど生活に根付き、科学的理論と併存することが見出されている。わずか80分の講義であつたが、「社会的制度や社会構造に焦点・外的帰属重視」と「一般的、一般化の範囲を限定する」2点について移行が見られた。特に、差別・偏見においては「一般化・一般化の範囲の限定」は重要

表3 しろうと理論と科学的理論との対比 (Furnham, 1988 に基づき作成)

しろうと理論	科学的理論
暗黙的、必要に応じて説明	明示的、内的一貫性、定式化
曖昧、整合性がない、矛盾をはらむ	整合性と首尾一貫性がある
帰納主義的検証	反証可能性の重視
相関から原因を推測	相関と因果関係を区別
記述的、内容志向的	説明的、過程志向的
個人的行動に焦点 内的帰属重視	社会的制度や社会構造に焦点 外的帰属重視
特殊的 (少数例から一般化)	一般的、一般化の範囲を限定する
弱い理論 (証拠が貧困、多義的)	強い理論 (信頼性の高いデータに基づく)

である。筆者が「素朴な」批判者と議論しているとき、それをきいていた A 氏に判定を求めると A 氏は「僕は判断できるほどホームレス問題をよく知らない」と答えた。まずはこのような態度を育成することが第一歩であると思われる。

総合考察

以上の結果をふまえた上で、教科道徳（「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説特別の教科道徳編」（文部科学省,2018）における内容項目（p25）を「ホームレス問題に対する「よくある・素朴な見方」と「支援者側の見方」と関連づけ、対応させたものが表 4 である。この表はホームレス問題と道徳教育に関して次のように整理される。

1.大前提として、「ホームレス生活者」を一括りにして考える（評価する）ことは不可能であり、それ自体が最大の偏見であるということが出来る。しかし、議論の整理のためにあえて対比させた。

2.ホームレス生活者の「よくある・素朴な批判」は教科道徳の内容項目の否定形であることが多い。以下は、「～していない」のではなく「～していない」ように見える、と評価されることが多いことを示す。

- (1) 自律していない（自立していない）。
- (2) 節度・節制がない。：生活習慣の乱れ、心身が不健康、安全ではない生活
- (3) 向上心がない（努力しない）。
- (4) 困難や失敗に（容易に）挫折する。

表 4 特別の教科「道徳」における内容項目とホームレス問題に対する2つの見方との関連

見出し	内容項目	よくある・素朴な見方	支援者の見方
(1) 自主、自律、自由と責任	自律の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつこと。	自律していない 結果に責任を持たない	迷惑をかかれないように自活している 自分で自分を責めている
(2) 節度、節制	望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心がけ、安全で調和のある生活をすること。	生活習慣の乱れ、不健康、不養生、歪んだ生活、不安のもと	野宿による生活の乱れ・不健康・異常な生活、安全性の低い生活
(3) 向上心、個性の伸長	自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求すること。	自己を見つめていない ひどい生き方	現妻を生きている(仕方ない) 必死に生きている
(4) 希望と勇氣、克己と強い意志	より高い目標を設定し、その達成を目指し、希望と勇氣をもち、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げること。	努力不足 安易に挫折	「普通の生活」から外部の状況により「陣落」
(5) 真理の探究、創造	真実を大切にし、真理を探究して新しいものを生み出そうと努めること。	(真実を知らない、知ろうとしない)	(工夫した生き方)
(6) 思いやり、感謝	思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること。	周囲との関係を切っている	周囲から関係を切られた 家族を守るために関係を切った
(7) 礼儀	礼儀の意義を理解し、時と場合に応じた適切な言動をとること。	無礼	—
(8) 友情、信頼	友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うとともに、異出こつての理解を深め、悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこと。	信頼関係がない 人間関係がない	仲間との関係がある/大切にす
(9) 相互理解、寛容	自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなもの見方や考え方があることを理解し、寛容の心をもって謙虚に他と学び、自らを高めていくこと。	(他者の立場を理解しようとしな い)	—
(10) 遵法精神、公德心	法やまりの意義を理解し、それらを進んで守るとともに、そのよりよい在り方について考え、自他の権利を大切に、義務を果たして、規律ある安定した社会の実現に努めること。	法を守らない 公衆の権利を軽んじる (勤労の)義務を果たしていない (差別や偏見を持つ)	種々の法律違反の犠牲 権利(生存権、居住権)の主張 納税の義務を果たす(した)
(11) 公正、公平、社会正義	正義と公正さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めること。	(差別や偏見を持つ)	差別や偏見の犠牲者

見出し	内容項目	よくある・素朴な見方	支援者の見方
(12) 社会参画、公共の精神	社会参画の意識と社会連帯の自覚を高め、公共の精神をもってよりよい社会の実現に努めること。	社会に非参加、社会から逃避、公共心が少ない	社会の中で生活、社会に参加させてもらえない
(13) 勤労	勤労の尊さや意義を理解し、将来の生き方について考えを深め、勤労を通じて社会に貢献すること。	働く気が少ない 働いていない	働く気があるが仕事が少ない 低収入の仕事をしている
(14) 家族愛、家族生活の充実	父母、祖父母を敬愛し、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築くこと。	家族を大切にしていない 家族から逃避	家族と心をつながっていない 家族愛・関係を希求する
(15) よりよい学校生活、集団生活の充実	教師や学校の人々を敬愛し、学級や学校の一員としての自覚をもち、協力し合ってよりよい校風をつくるとともに、様々な集団の意義や集団の中での自分の役割と責任を自覚して集団生活の充実に努めること。	(集団)を自分の周囲(限定)集団の一員としての自覚・責任がない	(集団)を自分を含めた広い社会とする
(16) 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度	郷土の伝統と文化を大切にし、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めること。	(地域社会の一員として)所属していない(所属感が少ない)	地域から排除されている 地域に所属させてもらえない
(17) 我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度	優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献するとともに、日本人としての自覚をもって国を愛し、国家及び社会の形成者として、その発展に努めること。	日本の恥(外国に対しては)愛国民として見ていない	現代日本の象徴
(18) 国際理解、国際貢献	世界の中の日本人としての自覚をもち、他国を尊重し、国際的視野に立って、世界の平和と人類の発展に寄与すること。	国際理解・貢献と無縁	国際基準の導入の必要性 日本文化による不平等
(19) 生命の尊さ	生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。	(優先度が低い)	(最高の優先度)
(20) 自然愛護	自然の崇高さを知り、自然環境を大切にするこの意義を理解し、進んで自然の愛護に努めること。	自分たちのために自然を守る	自然環境を利用
(21) 感動、畏敬の念	美しいものや気高いものに感動する心をもち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること。	無感動、畏敬の念なし	種々の感情の動き
(22) よりよく生きる喜び	人間には自らの弱さや臆さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることの喜びを見いだすこと。	よりよく生きる気が少ない 生きる喜びが少ない	「プライド」を捨て生きる

- (8) 人間関係ができていない、人間関係を求めない・作らない
- (10) 法律を守らない、社会の規律を乱す。
- (12) 社会に参加しない、公共の精神が欠けている。
- (13) 働いていない、働く気がない。
- (14) 家族を大切にしていない、家族から逃げている。
- (15) 集団の一員としての自覚がない。
- (22) 弱さを克服する強さや気高さがない。

3.まず、これらが「原因」ではなくホームレス生活による「結果」であることを確認する必要がある。誰でもホームレス生活になればこのような生活を強いられるのであり、このような特性の（あるいは徳性がない）ためにホームレス生活者になっているとは言い切れない。

4.さらに、2つの見方が対立する点が内容項目には含まれている。特に以下の6点である。

(1) 自主・自律・自由と責任：ホームレス生活者でも自主的、自律的に生活している人、責任を果たそうとしている人はいる。「自由（好き勝手に）生きて」いるわけではない。

(2) 節度・節制：ホームレス生活における結果であり、原因ではない。

(10) 遵法精神・公德心：例えば「公園の不法占拠」というが、災害時に避難者が生活しても「不法占拠」とはならないように、緊急避難的に利用しているという主張もある。法律の解釈や重要とするものの優先順位（生存権と公共の福祉；後述）が異なる。

(12) 社会参画・公共の精神：かつて「ホームレスを取り締められ」という投書に対して神戸市は「そういう人がおれない街というのは都市として何か足りないのではありませんか」とやんわりと返事した（中井,2006,p25）。このようにホームレス生活者も「社会」の一部・一員であり、社会参加している。

(13) 勤労：最大の批判は「働いていない」という点にあるが、事実と異なる場合が少なくない。ホームレス問題は基本的には労働問題である。ホームレス生活者は不況になれば増え、景気がよくなると減る。また、劣悪な労働環境や労働災害、違法な契約などの被害者がホームレス生活者には多い。

(14) 家族愛：出稼ぎで出てきたが送金できなくなり家族の元に帰れない、「身元調査」をされ、家族・親族・知人に迷惑をかけるため福祉制度に頼ることができないなど、家族愛からホームレス生活を余儀なくされている事例も少なくない。

5.ホームレス生活者に対する差別と偏見こそ、道徳の内容項目に反し、ホームレス問題・生活者に対する理解と支援こそが道徳の内容項目で求められていると考えられる。

(5) 真理の探究：事実と異なる誤解に基づき、偏見を抱き、差別する。

(6) 思いやり：人間愛の精神が求められる。

(9) 相互理解・寛容：寛容のころをもつて謙虚に学ぶことが求められる。

(10) 法やきまりの意義を理解し、それを守るとともに、そのよりよりあり方について考えること、自他の権利を大切にすることが求められている。

(11) 公正、公平、社会正義：正義と公正さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努める（全文そのまま）。

(19) 生命の尊重：生命の尊重、生存権の尊重が他の項目に優先される。

6.複数の項目の対立・優先順位

「権利」という用語が(12)「自他の権利を大切にし」「義務を果たす」という「規則の尊重」にしか用いられていないことに象徴されるように、人権・生存権よりも公共の福祉が優先されている印象は否めない。先述したように(19)生命・生存権の尊重は「求められるもの」では「前提」とされ、優先されているようにも読めるが、「Cグループや社会との関わりに関すること」と対立した場合の優先性が明確ではない。このような傾向が「社会の都合に悪いもの・人（実は自分に都合が悪い場合が多いであろうが）はいなくなれ（存在を認めない）という排除につながることを強く懸念するものである。

7.発達のレジリエンスモデル（鹿嶋,2017）では、「悪」との接触を前提としている。この場合「悪」とは、ホームレス問題・生活者のようなある基準からの逸脱としての「悪（bad, inappropriate）」、それを排除しようとする「悪」、「怖い・何もしない自分が嫌」「差別はいけないとわかりながら偏見は変わらない」など自分の中にある「悪」を含む。社会や教育が示す基準に従うことではなく、現実存在する「悪」と向き合うことをDMRは目指している。それはまさに今回の改定の「道徳教育の役割」で「社会を構成する主体である一人一人が、高い倫理観をもち、人としての生き方や社会の在り方について、時に対立がある場合も含めて、多様な価値観の存在を認識しつつ、自ら感じ、考え、他者と対話し協働しながら」目指すものであり、それは個人（子ども）の資質・能力にあるのではなく、社会・生活の中で「現実に生きられることが要求される（Jankélévitch,1986）」ものだと考えられる。

引用文献

- Damon, W. (1990). *社会性と人格の発達心理学*. (山本多喜司監訳). (Damon, W. (1983) *Social and Personality Development*. NYC: W.W. Norton & Company.)
- 出会いの家 (編著). (1996). *ホームレスになりたくない*. 神戸: EPIC.
- Furnham, A.F. (1992). *1988 しろうと理論*. (細江達郎監訳) 京都: 北大路書房.
(Furnham, A.F. (1992). *Lay theories*. Oxford: Pergamon Press.)
- 生田武志. (2005). <野宿者襲撃>論. 京都: 人文書院.
- 稲垣絹代. (2006). 「非定住者の生活ニーズと保健・医療・福祉の支援のあり方」報告書:
平成15年～17年度科学研究費補助金(基盤C一般)研究成果報告書.
- Jankélévitch, V. (1986). *道德の逆説*. 東京: みすず書房. (Jankélévitch, V. (1981). *Le Paradoxe de la morale*. Paris: Editions du Seuil.)
- 開発教育研究会. (2009). *ESD (持続可能な開発のための教育) 実践教材集 身近なことから世界と私を考える授業*. 東京: 明石書店.
- 鹿嶋達哉. (2017). 「発達のモラルレジリエンス」モデルの提案—思春期における悪との接触に対する青年期のとらえ直し— *広島国際大学心理学部紀要*, 5, 55-66.
- 鹿嶋達哉. (2018). ホームレス問題に対する2つの見方と心理学的関与の可能性: 2003～05年度におけるホームレス生活者に対する支援から. *広島国際大学総合教育センター紀要*, 3, 23-42.
- 北村年子. (1997). 「ホームレス」襲撃事件 “弱者いじめ”の連鎖を断つ. 東京: 太郎次郎社.
- 鯨岡峻. (1998). *両義性の発達心理学*. 京都: ミネルヴァ書房.
- Lave, J. & Wenger, E. (1993). *状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加*. (佐伯胖訳).
(Lave, J. & Wenger, E. (1991). *Situated Learning. Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge: Cambridge University Press.)
- Levinas, E. (2005). *全体性と無限*. (熊野純彦訳). 東京: 岩波書店. (Levinas, E. (1961). *Totalité et infini. Essai sur l'extériorité*, La Haye: M. Nijhoff, 1961, coll. « Le Livre de poche », 1990.)
- 永野重史 (編). (1985) *道德性の発達と教育*. 東京: 新曜社.
- 中井久夫. (2006). *樹をみつめて*. 東京: みすず書房.
- 松井計. (2003). 「生きる」ってなんだろう 6 ホームレスだったぼくから、きみたちへ

- 共に生きる社会を考えよう。 東京：実業の日本社。
- 文部科学省。(2018)。中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道徳編。
東京：教育出版。
- 村尾泰弘。(2006)。ホームレス暴行死事件から読み解く現代非行。 東京：ブレーン出版。
- 西村仁美。(2005)。悔 野宿者生活者の死と少年たちの十字架。 東京：現代書館。
- 太田薫里・小橋元・長野俊輔・木佐健悟・玉城英彦・福地保馬 2002 ホームレス者に対する認識と受容度に関する学生調査。 社会医学研究, 20, pp23-31.
- 芹沢俊介。(1998)。外から内にシフトした標的。斎藤次郎(編)子どもたちの世紀末。 東京：雲母書房。 p.28-36.
- 鈴木忠義。(2010)。学生たちの目から見た「ホームレス」。 東京：生活書院。
- 滝川一廣。(2017)。子どものための精神医学。 東京：医学書院。
- 吉田俊一。(2004)。ホームレス暴行事件—少年たちはなぜ殺してしまったのか。 東京：新風舎文庫。

